

●特集●

第69回大会レポート（於：東京学芸大学）

新会長挨拶 — 会長に就任するにあたって

汐見稔幸

日本保育学会の役割は何か、そもそも学会の役割とは何なのか。

会長就任に当たって、私が考えなければならないことは当然でしょうがこのことでした。

学問が歴史的に発展しているといえるためには、その学問の到達点の確認、学的課題の抽出と共有化、その課題への学的挑戦、その成果の交流と評価等がある程度組織的に行われなければならないでしょう。わかりやすいいえば、今保育学が明らかにしなければならないことはこれこれだ、それについての研究方法はかくかくで、それらについてみんなで探求しよう、そして、それらの成果を持ち寄って交流し学び合ったり批判しあったりして、現在の到達点と次の課題を鮮明にしよう、そしてみんなでその課題に挑もう。こうしたことが議論され共有される場が必要ですし、その努力が少しずつレベルを上げながら繰り返され、それがサイクルとして追求されるということが必要ということです。でないと、せっかくの誰かの学的創造も他の人に知られないで終わってしまったり、同じ内容の努力を交流なしに行うことで無駄が大きくなるということが常態化します。それ以上に、そもそも学問が次代にうまく伝わっていないことが問題となります。

歴史の中でアカデミーといわれる組織がつくられるのは近代になってからで、それまでは教会の中で個別に学問の蓄積と伝承が行われて来ました。日本では仏教もそうで、到達点を鮮明にし、さらなる課題を組織的に明らかにして系統的に追求することは、それほど簡単にできることではないことがうかがわれます。正師正伝という形で、特定の個人に師が教えを伝えるということも一般的でしたし、禅宗の場合、不立文字といって口ことばでそれを伝えましたから、学的追求をみんなで切磋琢磨して行うというのは長く一般的ではなかったようです。江

戸の後期に私塾ができてからようやく、ということでしょうか。それでも職人技を誰にも開放して議論し研究して伝えるということは今でも行われていませんし、大学も徒弟制の名残があり、学的追求を公開、交流しながら行うことはさほどやさしいことではないようです。

そう思ったとき、倉橋惣三先生たちが本学会を創始された頃からみて、保育学はどれほど発展しているのだろうか、そのことを考えてしまいます。ただ、間違いなく言えることは、倉橋先生たちが本学会を創始した頃に比べ、会員の数は飛躍的に伸び、保育という人間学的実践を学的に対象化して意味づけ、そのあり方を共同で探ろうという人が大きく増えていることです。あるいはその歴史をていねいに探究する人、保育という現象を共時的に分析しようとする人も確実に増えています。これは、本学会が、今述べたような学的交流、課題の抽出、実践と振り返り、さらなる探求というサイクルを実現する大事な場になってきたことを証明しているように思います。先人の努力に敬服です。

私はこの先人の努力を引き継ぎながら、21世紀中盤という人類史上最も困難が山積することが予想される時代を担うことになる人間を育てる現代の保育のあり方、意味づけなどを組織的に行える場、組織として本学会が積極的な役割を果たせるべく努力をして参りたいと思います。とりわけ、保育学の学問としての社会的評価を高めるための努力、そのための種々の実践の公表、保育が抱える社会的課題への社会科学的分析とそれらに基づく政策的提言、制度としての保育とそれを支える思想や慣習のグローバルな視点からの分析、関連諸科学との積極的交流による保育学の裾野拡大と洗練、英語等による発信と交流などに力を尽くしたいと思います。

よろしく願いいたします。

風薫る新緑の季節に開催されるビッグイベント。会員にとって5月の年次大会は、保育の実践と研究をもとに交流し、語り合い、旧友と再会するエキサイティングな場である。関東ブロックが開催の任に当たった第69回大会のテーマは「乳幼児期の教育／保育の再構築—研究と実践と政策を越境する—であった。口頭発表、ポスター発表、自主シンポジウム、実行委員会企画・教育講演という4名のレポーターのホットな報告から、成功裏に終わった大会を振り返る。

第69回大会を終えて

第69回大会実行委員長 岩立 京子

去る5月7日（土）、8日（日）に日本保育学会の第69回大会が開催されました。今大会の開催は、関東ブロックが担当し、東京学芸大学と白梅学園大学の会員が中心となって準備し、東京学芸大学を会場として行われました。天候に恵まれ、けやきの緑のアーチや、木漏れ陽が優しいテラスなど、自然豊かなキャンパスに皆様をお迎えできたことを大変うれしく思います。

今大会のテーマは、「乳幼児期の教育/保育の再構築—研究と実践と政策を越境する—」というものでした。今日のグローバル社会において、「越境」することを通して、新たなものと出会い、自明性が問い直され、新たな概念化や意味づけ、それにもとづく実践が生まれています。私たちには、グローバルな視点から、幼児や保育の過去、現在を問い直し、未来を考えていくことが求められています。今大会の開会式後に行われた会長記念講演で、秋田喜代美氏は、世界の保育の動向に触れ、OECDの会合での議論や様々なエビデンスに触れながら、現在の子もたちが大人になる2040年代に求められるキーコンピテンシーや社会情動的スキル、それらを育むための保育の質と園内研修の重要性について述べられました。会長記念講演は、今大会のオープニングにふさわしいものであり、「越境」から見えてくる日本の幼児教育の課題や、その解決のために私たちは何をすべきかを示唆してくださったように思えました。実行委員会としては、会長記念講演の他、大会のテーマに沿って、海外招待講演をプログラムに組み込み、日本保育学会やOMEPと共同して国際シンポジウムを開催しました。また、グローバルな視点から、世界の幼児教育、国際学会、行政システム、ジェンダー、脳科学などに関する教育講演を5つ、企画しました。これらの講演やシンポジウムを通して、参加者

の皆様に様々な発見、学びが生まれること、そして、それらが今後の研究や実践の深化につながることを願っています。

今大会は、二日間で過去最大の3529名が参加し、口頭発表293件、ポスター発表741件、自主シンポジウム53件が行われました。開催の準備が行き届かず、反省すべき点も多いのですが、大きな支障を来すことなく、3500名規模の大会を終えることができたことに実行委員一同、胸をなで下ろしています。保育の研究と実践と政策に関わる者が出会い、「知」の交流が生まれる場、親交を深める場である大会の開催を通して、日本保育学会の運営に貢献できたことに、ささやかな達成感ややりがいを感じることもできました。私は実行委員長として、この大会の開催に関わって下さった全ての皆様に感謝申し上げたい。誰一人が欠けても、今大会は成立しなかったと言える程に、皆様が力を発揮して下さいました。準備の過程で助言をして下さった理事・評議員の先生方や学会の事務職員の皆様、関東ブロックの有志、事務局長と副事務局長を中心とした50名を超える実行委員や協力委員のメンバー、準備を手伝って下さった100名を超える大学院生や学部生。そして何よりも、本大会に参加し、発表し、議論することを通して、本大会を有意義なものにして下さった参加者の皆様に心からお礼を申し上げます。

実行委員会企画 教育講演V 社会性の発達と脳科学

渡邊 朋子

日本人の生活環境は急速に変化し、特に情報機器の開発はめまぐるしい。このことが子どもの心身の発達、社会性の育ちにどのような影響があるのか、様々な事象や現象から不安の声が上がっている。人を司る脳への影響は…。この講演で何か根拠を得られるのではないかと楽しみであった。

開先生は発達神経科学を研究されている。「心の発達は色々なことに作用するが記述することは難しい」「科学的な研究方法とはエビデンスに基づいた理論の構築である」と話された。「社会性」「道徳」を学校で教えることができるのか、色々な実験の結果から推察することが出来るという提示があった。まずは乳幼児が自他をどのように捉えているかを理解することからである。

自己と他者の研究では、6カ月児に人がカーテンに隠された何か（人・箒）に話しかける実験を通し

て“人間と物との違い”を認識しており、人が物に向かって話しかけることに違和感をもっていることが分かった。

人とロボットについての研究では、人が会話をしている相手を隠し明らかにしたときに、インタラクティブなロボットよりもそうではないロボットに対して注視時間が長く、10カ月児は動かないロボットに話しかけることは不自然であると認識した。やり取りをしている相手が人でもロボットでも注視時間に差は無く、ロボットはコミュニケーションをとる相手として認識されたといえる。

映像を使った研究には、乳児に本人が映っているライブ映像を見せて自己と認識できるか、ライブと録画を区別できるか等がある。2歳児は、録画よりライブの注視時間が長く笑顔が多く、脳波、脳の動きにも違いがみられた。また、別の研究では、「今」か「今ではない」が分かり、乳児は「今」ということに敏感であるという結果が得られた。「人間は、教える動物（Caro&Hauser）」であり、教える＝教わるということでは相互作用である。学習は、教える側の教え方だけではなく教わる側にも関係する。また、学習の方法について、現実と映像の比較、条件の異なる映像が比較される研究があり、玩具の遊び方の獲得、外国語学習の場面での研究が紹介された。外国語学習では、実際に語りかけた時に現れた効果がビデオ学習では見られなかったという結果があった。

他に、子どもの反応に対する大人の応答の1秒の違いの影響、モーショニーズ、これ迄の研究結果を生かした「今性」、「応答性」をもって「教える」ことのできる人工物は創れるかという研究が進められていること等が挙げられた。

質疑応答で、社会性を育む保育理論、子どもの頃の環境の影響等については様々なケースがあり一概には言えないが、逆に保育現場においてこれらの研究が生かされることがあれば知りたいと、講師からの返答があった。保育現場にいる者として、伺いたいことは沢山ある。保育をする上で、保護者対応をする上で、科学的な研究はますます重要になると感じる。会場は、積み重ねられている研究と、積み重ねられている実体験（ある意味で感覚的な）が求められている空気感であった。

●Profile

渡邊 朋子（わたなべ ともこ）
 蒲田保育専門学校講師、手あそびうた研究会会員
 手あそびうたは「あそび」です。楽しい歌、優しい歌、おもしろい振り、難しい振り等、色々な型の曲があります。「心が繋がる」「手指の運動」等々、「手あそびうたが持っている力」を大切にしています。

自主シンポジウム J23 子どもの生活経験を広げ深める 教材や環境

植田 拓也

このシンポジウムでは、保育・幼児教育・小学校教育の「教材」という概念の相違点について、保育実践を通じた発表と討論がなされた。教材という言葉は、保育・幼児教育では日常的に使用しているが、保育所保育指針、幼稚園教育要領にはその文言は見当たらない。

はじめに、棟安奈保美氏（姫路市立船津こども園）より、「学びに向かう力を育む環境と体験」について話題提供があった。棟安氏は教材という用語は使用せず、環境という用語で捉えており、環境は子どもを取り巻く全てのものであり、直接体験できる人・物・空間・時間等や、地域、広域の自然・人・文化等であり、間接体験となる世界や宇宙等に至ると考えておられた。そして、園で経験する内容には計画的と偶発的があり、それら全てを環境と捉え、乳幼児期に出会う事が大切だと強調されていた。保育の中で、新しい発見や気づき、楽しみ自ら学ぶことができるように保育者は関わり、子どもたち自身が主体的になれるような環境の在り方が大切であると述べられていた。

次に上木美佳氏（宝塚市立西山幼稚園）より「幼稚園における教材とは」について話題提供があった。上木氏は教材を、子どもを取り巻く環境や環境構成として考えておられた。1つの事例として、園庭でこのぼりをさりげなく置くことで、子どもは風車が勢いよく回る様子や音、速さ等に興味を持ち体感し、風と関わる楽しさを感じる。次に、教師は実際製作を行うために教材研究を行い、子どもたちに素材や道具、必要な言葉がけのタイミングなどを綿密に計画し提供する。それらの体験を大切にしながら、製作が展開されていくと述べられていた。季節や保育環境を工夫し、意図をもって提供し、風も教材の一つと考え、広義の環境として捉え体験させることが大切だと強調されていた。

次に大西雅裕氏（神戸女子大学）より「デューイの言説からヒントを得る小学校生活科における教材観」について話題提供があった。大西氏は幼児教育と接続する小学校教育における教育論について考えておられ、幼児教育との接続を受けて誕生したのが生活科であり、生活科教材は活動材として認識されていた。教材は様々なものが急速に普及しており昨今ICT化もその中の一つとしてあり、デジタル教材や

ヒマワリの栽培等多岐にわたっている。教材は教師と子どもを媒介する働きをもち、授業の成立のため中立的なものだと考えておられた。また、生活経験の中から引き出せる材料もあり、経験と共に広がり深めることができ、それゆえに教師の役割は大きいと投げかけられていた。近年、教師の質が低下しており、教材を活かすも潰すも教師であり、質の担保のため様々な部分を組織化させることが重要であることを強調されていた。これからも、子どもが自ら考え、学びのための教材の実現を目指すことが大切と、話を締めくくられた。

最後に指定討論の三宅茂夫氏（神戸女子大学）より、教材の概念と相違点について、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭が子どもたちに関わる難しさとして、教育的ならいと遊びの楽しさの両立等の点が整理され、フロアからも活発に意見が交わされた。「教材」を改めて考える機会となった。

●Profile

植田 拓也（うえだ たくや）
社会福祉法人愛和会 高槻あいわ保育園 園長
自然との触れ合い遊び・環境教育について、かみつき行動について興味関心があり、活動研究を行っている。

口頭発表D5 保育者の資質能力・保育者の 専門職性など3

近藤 千草

5月8日の口頭発表D5「保育者の資質能力・保育者の専門職性」における発表内容について報告する。

須藤麻紀氏（新渡戸文化短期大学）は、保育者の離職経験に対する自己評価について分析した。離職の決定には葛藤を伴うが、結果として離職を肯定的に捉える傾向が示された。離職により保育職の意義や自身の保育観を見つめ直し、ライフコースに合わせたあり方を模索できるようになると考察された。

野田美樹氏（岡崎女子短期大学）らは、保育者に必要な「しなやかさ」について検討した。しなやかさとは、保育現場と養成校との連携を通して働き続けることのできる保育者を指す。しなやかさを形成する一要因として、モデルとなる保育者の存在の大きさが示唆された。

池田隆英氏（岡山県立大学）らは、保育者の職務・資質に関する調査を行った。その結果、対人技法、免許や資格取得に必要な知識・技術、生活習慣等の項目において高い必要性が示された。一方、園

内の上下関係や、バーンアウト状態があることも指摘された。

堀千代氏（常磐会短期大学）らは、保育現場が新卒学生に求める力について調査した。採用試験においては、ピアノ演奏力や作文力、絵本の読み聞かせ力等が求められ、一方、園側は、明るく挨拶ができる、約束事を守る等、社会情動的スキルを求めており、保育者養成校ではこのような力を養う必要性が示された。

岡田たつみ氏（帝京大学）は、子どもの算数的体験について、保育記録より分析を行った。3歳2学期の子どもたちの遊びや生活の中で発せられた言葉の中に、数に関する概念（量、図形、時間等）が含まれていることを示した。身体の発達に伴う行動範囲や人間関係の広まりと共に、算数的体験もダイナミックになっていく。

吉田直哉氏（神戸松蔭女子学院大学）らは、保育学生が抱く発達観について、環境的要因と遺伝的要因から分析した。その結果、「環境」「遺伝」のいずれか、あるいは双方に帰する学生は、帰し方の相違にも関わらず、「環境・遺伝」の両要因が発達に作用しているという理解を共有していることがわかった。

以上の研究発表を受け、全体討論が行われた。第一は、保育者の資質に関する問題である。保育現場の調査から、新卒保育者に求める資質として、社会人としてのモラルに関わる内容が挙げられ、養成校にもその育成に期待が寄せられたが、「保育の専門性」を考えると、その根拠をどこに据え、どのような保育者を育成していくか熟考する必要がある。「人間性」と「専門性」の両面から考えていく重要性が確認された。

第二は、保育者養成のあり方についてである。養成は就業後も研修等を通じて継続的に行われる必要がある。早期離職の問題が提示され、その要因として人間関係の影響が指摘されたが、人間関係悪化の要因を追究すると共に、しなやかさのある保育者を育成する点について、政策との関連の中で行っていく必要がある。キャリアの見通しについても現職保育者と共に学生に伝えていくことが課題となる。

●Profile

近藤 千草（こんどう ちぐさ）
川村学園女子大学教育学部幼児教育学科 准教授
幼稚園教員養成の歴史的経緯を踏まえ、今後の教員養成に必要なカリキュラム構成や教育内容について実証的な分析を伴う研究を行っている。

ポスター発表PD2 保育内容Ⅱ(健康・人間関係・環境・ 言葉・表現)など11

神戸 洋子

第69回大会では、ポスター発表の数が増加した。ここでは、盛況であった保育内容Ⅱ(健康・人間関係・環境・言葉・表現)などの発表について報告を行う。

「幼児期の身体表現におけるインタラクション」では、ニュージーランド発祥のラーニングストーリーと加速度センサーを組み合わせ、3歳男児の活動時の自発的な共愉化場面を起点とした指導により活動量に変化がみられたことを報告するもので、該当児に対する継続した観察と、この測定方法を用いたことによる保育者の育ちも今後の課題としている意欲的な研究であった。「保育における「言葉」の持つ特徴：関連文献の内容分析から」は、「保育所保育指針」と「幼稚園教育要領」における「言葉」という用語の扱いと助詞の扱いに着目した研究であった。「保育における人形の役割と効果」では、児童文化の中でも、研究事例の少ない人形劇についての実践的な研究であり、「ただ表面だけの面白おかしさ」ではなく一歩進めて「心の奥深く届く」教材を模索している点が評価に値するものであった。「保育者養成校における環境教育の取り組み—野外活動に着目して—」では、学生対象の1泊2日のキャンプ体験を通し、将来の保育者が直接体験の大切さに気付く場面を設定したもので、継続的に行ってほしい取り組みであると思えた。「保育者養成課程における表現教育に関する研究(1)—絵本から図形楽譜へ—」は、既成の楽譜に囚われない自由な楽譜づくりという表現活動の記録でその展開が期待できるものであった。「保育者養成課程における表現教育に関する研究(2)」は、「手」による身体表現に着目して表現活動を行う試みであった。「手」から発する音やリズムに色や形を与えようという点の展開を今後も継続してほしい。「乳幼児期の保育とアートの関わり」では、表現することによって他者との相互作用を引き起す活動を「アート活動」と呼び、絵具で遊ぶという発想で保育活動を捉えようとするものであった。「乳幼児の描画活動に関する一考察」では、いつでも描画活動ができる環境を設定し、窓ガラスに描くなど工夫を凝らした保育の事例研究であった。「保育の中の自然に根差した生活文化と芸術表現のつながり」では、自然に根ざした保育が芸術表現と深く繋がりあう実践を4つの保育現場の事例という形で発表したもので、みかん山に行くことを「みかん山が子どもたちを待ってい

る」と表現するなど、自然と芸術の融合を模索するものであった。「テーマ遊びにおける保育者の役割」では、テーマを設定することで、表現活動がより広がるという活動事例のひとつ「オズの魔法使い」をテーマにした活動での保育者の役割に言及し、テーマを深め発展させるだけでなく、十分楽しんだ活動をどのように余韻を残しながら収束させるかの配慮まで組み込んだよい活動報告となっていた。

会場では活発な質疑応答が展開され、各々が研究や保育の現場に持ち帰る刺激を得ていた。PD2の発表の3件が大学院生による発表で、保育現場からの実践研究も若手が担っている。これからの保育を、また学会を担う若手の真摯な研究態度が窺える会場であった。

●Profile

神戸 洋子(かんべ ようこ)

池坊短期大学 幼児保育学科 教授

次世代を担う若者に向け、生け花や京都ならではの伝統を保育に、そして更に日々の生活にも活かしてほしいとの期待を抱き新学科が立ち上がった。子どもの文化、絵本、児童文学にも伝統の上に根を張りつつ新しさも取り入れ、自然との共存を考えていきたい。